

# 木原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く 98

## 杉沢遺跡の発掘・その①

— 地域と大学と行政の連携 —

### 北近江で最初の発掘

明治時代以来、杉沢では石器が出土することが知られていました。大正一三年（一九二四）に郷土史家・中川泉三が御物石器と磨製石斧を『考古学雑誌』に紹介したことで本格的な調査が始まりました。

杉沢遺跡の調査は昭和一三年（一九三八）に京都大学助手の小林行雄らによって「これらの石器を伴出する土器の性質を確かめる」ことを目的に、北近江で最初の発掘調査が勝居神社付近で行われました。調査の結果、二組の縄文時代晩期後半（約二五〇〇年前）の埋葬方法である「合せ口甕棺」が出土し、『通論考古学』や『日本考古学辞典』などに紹介され、杉沢遺跡を一躍有名なものになりました。甕棺とは、二つの深い甕型の土器の口をあわせて、なかに

子どもの遺体を収めた棺のことです。

昭和二九年（一九五四）には、京都学芸大学（現京都教育大学）による調査が行われ、さらに合せ口甕棺一組が出土しました。

その後、三四年経過した昭和六三年（一九八八）のほ場整備事業に伴う調査では、縄文晩期前半の良好な土器群が出土しています。平成七年と平成一五年にも甕棺が出土するなど、これまでに一一基の甕棺が出土しています。

杉沢遺跡の個々の発掘の規模は大きくありませんが、その出土資料は良好かつ特徴的で、石器類では、石鏃や石皿などの一般的な生活用具のほか、多頭石斧や大小の石棒、石剣、玉、県内唯一の御物石器などの儀礼的性格の強い石製品など多種多様な石器が出土しています。土器は、

中期末（約四〇〇〇年前）の土器のほか、中部山岳地域から持ち込まれたものや、晩期の土器は東海地方の影響を受けた土器も出土しています。

### 地域と歩む文化財

平成二三・二四年度、地元区や地権者の方のご協力を得て、市教育委員会と立命館大学が杉沢遺跡で学術的な発掘調査を行いました。

すでに述べたように、杉沢では、これまで一一組の甕棺墓や石器が見つかっていますが、住居など、墓以外の縄文時代の生活の痕跡はよくわかっていませんでした。今回の調査では、とくに縄文時代の住居の発見に重点が置かれました。住居が明らかになれば、杉沢遺跡の全体像を明らかにすることができ、遺跡への理解と愛着が一層深まります。墓に住居が隣接するかどうかという、晚期集落構造の議論にも貢献できます。

しかし、平成二三年度は、住居の検出にはいたりませんでした。木の実などをたくわえた貯蔵穴一基、土器を利用した墓一基、柱穴状の小さな穴二基などの晩期の遺構を確認し、調査区またはその近くに住居がある可能性が高まりました。



調査期間中、八月一四日の杉澤区夏祭りには、学生たちが準備、運営のスタッフとして参画し、遺跡発掘が紹介されました。教育委員会主催の発掘体験や、地元春照小学校五・六年生の見学会では、学生たちが先生役をし、子どもたちは地域に眠る大昔の歴史に興味しんしんで、休みの日などに拾ってきた石を持って発掘現場を訪ねる子どもたちもいました。夏休みの短い期間ではありましたが、学生たちの声が地域に響き、華やかな雰囲気をもたらしました。調査結果の詳細は次号で紹介します。

（歴史文化財保護課）